Fumio Kishida DETAILED REPORT MAGAZINE ［自由民主党広島県第一選挙区支部］

FK翔 季刊

しょう

希望・勇気・決断、歴史に耐えうる政治を

TRY TO THE BEST

Quarterly 2014 vol.60

フランスで行われた「日仏２プラス２」の際のオランド大統領表敬
左から岸田外相、ファビウス外相、オランド大統領、小野寺防相、ルドリアン国防相

Contents

● 特別企画
岸田文雄の素顔に迫る

特別企画 岸田文雄の素顔に迫る

「まじめ」「誠実」「さわやか」「イケメン」——岸田文雄の印象を聞くと、たいていこのような言葉が返ってくる。また「政策通」「選挙に強い」「酒豪」と言う人、さらに永田町で仕事を共にする議員や記者に聞くと「頑固」「タフ」「なんでもこなすゼネラリスト」などという言葉も聞かれる。

岸田文雄の、どの場面を見たかによって印象は変わるのだろうが、これらのキーワードをもとに、岸田文雄という政治家の素顔に迫ってみよう。

「宏池会のプリンス」と呼ばれた若手時代

岸田文雄は平成五年の第四十回衆議院総選挙で初当選し、以後連続当選を重ね現在七期目である。初当選の時の選挙は自民党が大敗を受けて初めて下野した時の選挙だった。つまり最初の選挙が大逆風の選挙であり、一期生の時は野党生活から始まったわけだ。しかしこの時の選挙でさえ岸田は中選挙区時代の広島一区（定数四）においてトップ当選を果たしており、この時からすでに「選挙に強い」というイメージの片鱗を見せている。

なお、この時初当選した同期議員には、安倍晋三総理、野田聖子総務会長、根本匠復興大臣、塩崎恭久元官房長官、浜田靖一元防衛大臣などがおり、まさに今の自民党の中心を担っている世代と言える。

岸田はこれまで様々な役職に就いている。自民党においては「商工部会長」「青年局長」「経理局長」「団体総局長」「国会対策委員長」などであり、公職では「建設政務次官」「文部科学副大臣」「衆議院厚生労働委員長」「沖縄及び北方担当大臣」「消費者行政推進担当大臣」、そして「外務大臣」と、羅列するとジャンルを問わず幅広い肩書きが挙がる。ゼネラリストと評される所以はこの辺にあるが、まず岸田の衆議院議員としてのキャリアは、衆議院議員に当選する以前に日本長期信用銀行に勤めていたこともあり、経済や商工関係からはじまる。

先述したように岸田の衆議院議員としての仕事は野党議員としてスタートした。本来であれば一回生議員が出来る仕事はそんなに多くない。政府に入れるわけでもないし、重要法案で質問に立てるわけでもない。しかしこの時の自民党は立党以来初めての下野ショックに見舞われ、党内のモチベーションがかなり低下していたこともあって、逆にそれが新人議員である岸田らにとってはチャンスとなった。当時の一回生議員に委員会の質問に立つチャンスを与えられ、多くの委員会で質問に立つことができたのだ。岸田も大蔵委員会など五つ以上の委員会に所属し、連日質問に立って与党を質した。

この経験は大変に大きく、今に繋がっていると岸田は言う。この世代に政策通と呼ばれる議員が多いのも、こういう事情が作用しているのかもしれない。

当選二回目には自民党は与党に復帰しており、与党議員として岸田は一気にキャリア階段を上る。「出世の登竜門」と呼ばれる青年局長や議事進行係を歴任し、その後第二次小渕内閣において建設政務次官に就任する。

この後も岸田は様々な役職に就くが、永田町で言われる「出世の登竜門」ポストにことごとく就任することになる。

またこの頃からそのイケメンぶりもあり、永田町では「宏池会のプリンス」と呼ばれ、早くから知る人ぞ知る政治家として認識されるようになる。

酒豪伝説

この時代の自民党の若手は「政策新人類」と呼ばれた世代である。若手時代から政策や議論によって存在感をアピールし、平成十年のいわゆる「金融国会」では、金融機関の不良債権や破綻などを処理するための金融制裁法の制定などに中心的な役割を果たしてきた世代だ。この年の岸田は予算委員会に所属し、議院運営委員会では議事進行係という若手の登竜門に抜擢され、党においては小売商業問題小委員長に就いており、まさにこの金融国会で果たしてきた役割の大きさが窺える。

平成十二年には派閥横断の自民党若手議員グループ「明日を創る会」を設立。石原伸晃・浜田靖一・塩崎恭久・田村憲久などが参加し、次世代の日本を担う人材のグループとして注目を集める。また当時は「ＹＫＫ(山崎拓・加藤紘一・小泉純一郎」という自民党中核の派閥横断グループがあったため、「ポストＹＫＫ」と呼ばれていた。

若手時代の岸田と言えば、台湾での「酒豪伝説」が印象深い。岸田が自民党青年局として台湾を訪問した際、当時の青年局長である安倍晋三や同じく青年局だった浜田靖一が全くの下戸だったため、酒の強い台湾議員の「カンペイ(乾杯の意。台湾では飲み干すのがマナーとされる)」攻撃を前に、日本側は岸田がそれを一手に引き受けたというのだ。

また別の伝説として、「飲む前にお金を預けて一番安心なのは岸田さんだった」という同僚議員の証言もある。若手議員同士で酒を酌み交わす際も、岸田はどれだけ飲んでも酔わなかったらしく、安心して深酒ができたというのだ。

そしてその酒豪ぶりは十年以上経った今でも健在だ。同僚議員や記者との懇談会で大盛り上がりだった翌日でも、岸田だけはケロッとしており、「なぜそんなに酒が強いのか」とかなり年下の記者でも白旗を揚げる始末である。

さらにこの酒豪伝説は世界を舞台にしても発揮される。平成二十五年十一月に行われたロシアのラブロフ外相との日露外相会談の後の会食の席に、岸田は広島の地酒を持ち込み、ラブロフ対して「私の地元の日本酒を飲もう」と杯を注ぎ、なんと3時間も飲み比べをしたというのだ。あのウオッカの本場ロシア人を向こうにして負けない酒豪ぶりは、当時の新聞にも掲載されたぐらい(平成24年12月24日付け産経新聞)である。

交渉の場では粘り強いタフな交渉を行い、一転懇親の場では得意の酒で相手の懐に飛び込む。岸田の交渉術は昔も今も変わらないようだ。

波乱と安定の中堅時代

平成十二年十一月「加藤の乱」が起こる。岸田が所属する宏池会の会長であった加藤紘一が、当時の森内閣への不信任案に賛成する動き見せたもので、岸田も宏池会所属として加藤と行動を共にする決意を固めていた。結果的には加藤が不信任案賛成を断念し本会議を欠席することで幕引きされたが、当時の岸田は、この時点で離党を覚悟していたという。事前に後援会には離党の意思を伝えたらしい。また，この時の本会議は深夜に開かれたため、当時宏池会に所属していた石原伸晃・塩崎恭久・根本匠との四人で本会議前に集まり、ドライマティーニを一気飲みして「出陣式」を行って覚悟を決め、本会議に望んだというのだ。歴史に「もしも」はないが、この四人はもはや閣僚や党役員を何度も務めた現在の自民党の中心であり、もしこの四人が自民党を離党していたらいまの永田町はどんな形になっていたのか、興味深いところではある。

ちなみに今でも毎年十一月にこの四人で集まり「ドライマティーニの会」を開催しているとか。

平成十三年、岸田は小泉内閣で文部科学副大臣に就任する。副大臣ポストは同年一月に森内閣の下で行われた省庁再編に伴い新たに新設されたものであり、岸田は文部科学省の二代目の副大臣(文部科学副大臣は二人いるので三・四人目)にあたる。

初当選からかなり早い出世街道を歩んできた岸田だが、この一代前の文科副大臣(森内閣)は、当選回数が岸田より1～2回も上の議員が付いていたというポストであり、その早さが際立っていると言える。年齢など15以上も上だ。また、岸田が就任した代の全ての象徴の副大臣の中でも、ダントツに早くて若い。ちなみに第三十一代自民党青年局長であり第三十二代青年局長の岸田にバントタッチした安倍晋三は、小泉内閣では内閣官房副長官に就いてる。

平成２６年２月、第５０回ミュンヘン安全保障会議において講演

岸田が副大臣を務めていた時の文部科学大臣は遠山敦子氏である。もとは文科省の官僚とは言え、政治家ではないため国会対応には苦労したようで、その分だけ岸田副大臣の果たす役割は多かったという。特に副大臣就任直後に起きた池田小学校事件では、真っ先に現場に駆けつけ、まだ事件の余韻の残る当事者達と直接話し合いの場を持った行動は、常に国民の声を耳に傾けて行動してきた政治家の決断ある行動であり、また後に「現場主義」を大臣室で掲げる岸田だからこその行動だったとも言えるだろう。

副大臣退任後、しばらく岸田は自民党の経理局長という党務に就く。経理局長は文字通り党の金庫番であり、その性格上、世間的な知名度は低いが永田町の中では人気の花形ポストである。岸田は副大臣前にも経理局長に就いており、正式な資料はないそうだが自民党の長い歴史の中でも通算すると5本の指に入るぐらいの在任期間だったとのことだ。幹事長直轄の経理局長ポストを長く務めることで岸田は党内にも大きな影響力を持つことになる。

ちなみにここでも安倍晋三との奇妙な縁が続く。安倍晋三が幹事長に就任した際にも岸田は経理局長をつとめていたのだが、安倍の父親安倍晋太郎が幹事長の際、岸田の父親岸田文武も経理局長をつとめていたのである。

ここに一枚の写真がある。ポスター作成用に平成十七年に撮られた写真だが、その顔ぶれをよく観察すると大変感慨深いものがある。総理大臣安倍晋三・自民党幹事長石原伸晃・内閣官房長官塩崎恭久・復興大臣根本匠・みんなの党代表渡辺喜美・法務副大臣河野太郎、岸田も現在外務大臣をつとめ、まさに今の永田町のど真ん中に位置する面々である。しかしこの当時はまだ、最も出世していたのが岸田よりも一期上の石原の国土交通大臣で、安倍も入閣経験はなかった時代である。この写真はまさに次世代の政治の顔ぶれであったと言えるだろう。今まさに政治の中心にいる面々だが、それぞれの立場で今後どう動いていくのか興味深いところだ。

平成十八年、小泉純一郎が総理を退任し、その後継者を争う自民党総裁選が世間の注目を集めた。いわゆる「麻垣康三」の時の総裁選だ。結果的にこの総裁選では安倍晋三が勝利し総理大臣に就任することになるのだが、この総裁選の少し前から岸田は別の動きをしていた。「大宏池会構想」だ。

永田町の中でも名門派閥と言えば宏池会であり、自他共に認める保守本流派閥である宏池会は、この時三つの系統に分かれていた。加藤の乱の時に二つに割れた「丹羽・古賀派」と「小里派」、そして河野洋平元衆議院議長が加藤紘一の派閥会長就任をきっかけとして分離していた「河野グループ」だ。大宏池会構想とは、この三つに分かれた宏池会系の派閥を元の一つに戻そうという構想である。岸田は中堅議員としてその構想の中心に関与し、三派の議員を中心に「アジア戦略研究会」を立ち上げるなど、最も「汗をかいた(永田町用語で最も苦労したとの意)」議員であった。

しかし麻垣康三の総裁選では小里派の谷垣禎一と河野派の麻生太郎が共に出馬をしたため、このタイミングでの三派合流は実現しなかった。さらに総裁選では派閥を超えた安倍支持が各派に広がったことも大きかった。そのため結局丹羽・古賀派内も一枚岩とは言えない状況となり、組閣時には大宏池会構想に奔走した岸田は無役に終わった一方、安倍選対に入った丹羽や塩崎は総務会長や官房長官に抜擢されるなど、派閥内でも明暗を分けた。

しかし岸田はあの時を言っている。「いつかこの動きは実を結ぶことになるだろう」と。

事実平成十九年に、古賀派と谷垣派は合流を果たし「中宏池会」は達成した。

さらにその後に岸田は宏池会の会長に就任することになる。

初入閣と多忙な毎日

総裁選では揮わなかったが、しかし岸田の初入閣は意外と早く訪れる。安倍内閣が発足しから約一年後、平成十九年の改造内閣で、岸田は沖縄及び北方担当大臣などで初入閣したのだ。改造後一ヶ月程度で安倍は総理を辞任するため、直後に福田内閣が組閣されたが、ここでも岸田は引き続き入閣することになる。

福田内閣では岸田は多忙を極める。福田総理は目玉政策であった消費者庁新設に向けて消費者政策推進担当大臣を新設したのだが、それに岸田を当てる人事を発表。これを受けて岸田は特命担当大臣として省庁や消費者団体の間に入って折衝を行い汗をかいた。こんなことまで大臣自らがやるのかと感心する官僚もいたぐらい、岸田は「現場主義」を徹底した。「環境庁」以来、三十二年ぶりの本格的な省庁新設はそう簡単な仕事ではなく様々なところからの抵抗があるものなのだが、岸田は見事にその礎を築いたのだ。

ちなみに消費者問題は伝統的に自民党にはスペシャリストが少なく、むしろ岸田がパイオニア的な存在である。若手時代から食品表示問題に取り組むなど、革新系が強い分野と言われていた消費者問題に早くから関わってきた歴史がある。その上で消費者庁設置の礎を作った岸田は、今では永田町の消費者問題のスペシャリストとして知られ、この分野からは直接は離れた今でも、永田町の消費者問題分野では一目置かれている存在だ。特に大臣当時の「中国ギョウザ事件」への対応は今も記憶に強く残る。

また福田内閣ではさらに宇宙開発担当大臣にも任命され、担当は合計6つにまで渡った。「宇宙から食卓まで」を一手に引き受ける奮闘ぶりだった。この際テレビ番組に岸田の名刺が紹介されその肩書きの多さに注目を集めたのだが、岸田自身は「自分よりも名刺の方が先に出演依頼が来た」と冗談を飛ばしていたという。

先述した通り岸田は自らの大臣室で「現場主義」を掲げる。消費者庁設置に向けて自ら現場に足を運んだだけではなく、沖縄北方担当大臣としても積極的に現地に赴いた。特に沖縄の南・北大東島などいわゆる離島と呼ばれる地域にも大臣として積極的に訪問するなど、現地の方とコミュニケーションを取り続けた。その結果、いまの永田町で沖縄との最も太いパイプを持つ政治家が岸田文雄だと言われるぐらい(それが外務大臣起用の要因になったとさえ言われている)まで関係を構築したのだから、その現場主義の徹底さが見て取れるだろう。

泡盛で知られる沖縄の人に対しても酒豪ぶりを発揮したに違いない。

アメリカ国務省内John Quincy Adams Roomにおいてケリー国務長官と

政治家としての転換期
政権交代選挙・国会対策委員長
宏池会会長就任

大臣退任後は、またしばらく党務に就くことになる。自民党団体総局長である。団体総局長とは自民党と民間の各種団体との窓口になる役であり、本来なら議員自身の繋がりをさらに広げるチャンスでもある。しかしこの時期の自民党は麻生内閣の時代であり、立党以来最も世間の風当たりが厳しい時代だった。「何を言っても嫌われた」と当時の自民党関係者は言っていたが、その大逆風の中においては、各種団体とのパイプをつなぎ止めるだけでもかなり厳しかったと言う。

日豪２プラス２。左からジョンストン国防相、ビショップ外相、岸田外相、小野寺防相

そして、平成二十一年のいわゆる「政権交代選挙」を迎えることになる。岸田は自民党の中でもトップレベルで「選挙に強い」と言われる。選挙に強い政治家の理由についてよく「看板・カバン・地盤」なんて言われ、岸田自身も先代から受け継いだ地盤はあるが、しかし選挙区自体は政令指定都市の一区という「風」を最も受ける地域のひとつであり、決して地盤だけで勝てるような地域ではない。もしそれが通用するなら自民党はここまで大敗しなかっただろう。

岸田は自民党の中でも最も普段から選挙区をこまめにまわる議員である。大臣任期中等でなければほぼ毎週必ず地元に戻るのだそうだが、これは当選６～７回の議員としては考えられない戻り方だ。さらに初当選以来毎週街頭演説を繰り返す姿も「そこまでやるか」と言われ、まだ自民党の政治家の街頭演説が一般的でなかった初当選当初など、そんなことをする時間があるなら東京にいろと言われたことすらあるのだという。しかしこうした行動は、有権者から直接声を聞き国政に反映させることこそが政治の本道だと信念を持つ岸田の行動原理のあらわれだろう。

地域に根ざした活動をしていたからこそ岸田は政権交代選挙を勝ち抜いた。選挙ではこれまでの倍以上に街頭演説を増やし、熱意を持って自らの信念を語り国民に理解を求めた結果である。広島県内では岸田だけが自民党で小選挙区を勝ち抜いた。また全国的に見ても、小選挙区制度に移行した際に政令指定都市だった都市の第一区において、一度も負けることなく連続して選挙区で勝ち抜いてきた自民党議員も、この選挙をもって岸田だけとなった。

自民党の政治家としてこの選挙を勝ち抜いた意義は非常に大きい。野党に転落した自民党だったが、長年与党にあり続けた政党であることには違いなく、新しい民主党政権の受け皿として大きな責任を担う野党である。その中において議員であり続けている意義は想像以上に大きかったと言えるだろう。

果たしてその活躍の機会は簡単に巡ってきた。岸田は自民党国会対策委員長に就く。国会内での自民党の最高指揮責任者であり、自民党が野党として国会でどう動くのか、それが岸田の双肩にかかったのだ。

そして、民主党政権のメッキがいとも簡単に剥がれた。たった３年で政権はまた交代する。国会対応もデタラメだったという。岸田国対委員長はそれを的確に指摘し、それが実って自民党はついに民主党政権を解散に追い込んだのである。

国会対策委員長時代、与野党協議終了後に記者に囲まれて

自民党が野党の最後期に岸田は宏池会の会長に就任することになる。当時会長の古賀誠が次の選挙には出馬せず議員を引退すると表明したことを受けてのことだ。しかしその直前に行われた自民党の総裁選において、宏池会の旧谷垣派系が宏池会から離脱してしまい、またもや宏池会は3系統の派閥に分かれてしまっていた。岸田の派閥会長就任は、野党の中における派閥の役割という課題も含めた、派閥の立て直しから始まったと言えるだろう。

岸田はこれらの混乱の中で派内をよくまとめ、この後の衆議院選挙においては新人議員の発掘と応援を精力的に行い、派閥の拡大に成功する。

そして外務大臣就任

宏池会会長として全国を飛び回ることとなった衆議院選挙で自民党は大勝する。これを受けて平成二十四年十二月、第二次安倍内閣が発足し、岸田は外務大臣に就任する。言うまでもなく最重要閣僚である。

第二次安倍内閣には宏池会から林芳正農林水産大臣・根本匠復興大臣・小野寺五典防衛大臣と4人の閣僚を送っており、これは各派閥の中では宏池会が最多となった。正直これは意外な人事であった。なぜなら安倍が自民党総裁に就任することとなった総裁選の際、宏池会は別の候補を応援していたからだ。

小野寺は岸田と気心が知れる仲であり、頻繁に二人で食事をしていることはよく知られているところだが、組閣数日前にも二人で食事をしており、そこでは「(総裁選で負けた自分たちは)しばらくは冷や飯生活になるだろうけど、こういう時にこそしっかりと冷や飯を食べて次に備えて頑張ろう」と会話をしていたのだ。それなのにまさかその二人ともが入閣をし、まして外相と防相という重要閣僚になるとは思っていなかったと言う。

しかしいざ仕事を始めると、さすが「政策の宏池会」である。外相も防相も次々と実績を残す。外相と防相という外交・安全保障の要の大臣が息の合う二人であることも大きい。自衛隊の基地を外相として初めて視察したり、事前調整なしに大臣同士で携帯電話で擦り合わせを行ったり、政策通で知られる二人ならではの高いレベルでの瞬間的な判断を即座に下したりと、かなりのフットワークの良さを見せている。それは安倍内閣になってから、ロシアやフランスと史上初の「外務・防衛閣僚会談(2プラス2)」を続けざまに成功させたところにも見て取れるだろう。

また岸田の答弁の手堅さは永田町随一だ。記者に「最も失言しない政治家は誰か」と問うと多くの記者が岸田の名を挙げる。これまで失言問題で政権運営が揺れた事例もあるだけに、この岸田の安定感は何よりも安倍政権にとって武器になっている。

ただしそれだけにスクープを狙いづらく、記者泣かせだそうだ。

岸田の「現場主義」は外務大臣でも発揮される。可能な限り海外に赴き直接要人と会ってコミュニケーションをとる。外交の基本は人間関係だ。そういう意味で岸田の昔から一貫した人付き合いや交渉術は外交の舞台で大いに活用されていると言えよう。また、ただ外国を訪問し会談するだけでなく、例えばアメリカでは日系人コミュニティの代表者達と会い情報交換するなど、細かい配慮や根回しも自らが行う。大手マスコミは国際会議などセンセーショナルな部分ばかり伝え、なかなかこういう細かい行動を報道しないが、真の国益の確保のためにはむしろこういう大臣自らの行動こそが必要なのではないだろうか。

岸田は安倍内閣が掲げる「地球儀外交」の根元を支えている。すでに外遊回数23回(56泊114日)、訪問国と地域はのべ41(正味33)カ所、総移動距離は520,081Kmにおよび、これは地球を13周している計算になる距離だ。安倍総理の外遊も多いが、岸田外相の外遊もかなり多い。

なにより岸田は広島選出ということもあり平和外交に力を入れる。平成二十五年十月の国連における「核兵器の非人道性と不使用を訴える共同声明」に日本として初めて署名したことは、やもすれば安倍カラーに似つかわしくないものとして一部では受け止められていたが、外相が岸田だと知ればそれも納得できる。核問題で揺れるイランに対しても積極的に外相会談を行い、ＥＵとの橋渡しも行った。軍縮・不拡散イニシアティブ（NPDI）を八回目にして初めて被爆地広島で開催し、日本こそが積極的に中心となって取り組んでいる姿勢を示した。

タカ派的だと見られる安倍内閣において、自らが推し進める地球儀外交の根元をリベラルの宏池会会長である岸田が担う意義は大変に大きい。一部宏池会の存在感の低下を懸念する報道も見られるが、しかし存在感とは果たして外野から注文を付けることだけを指す言葉であろうか。いや政権中枢に飛び込み着実に実績を積み重ねることこそが、国益に資する行為であろう。むしろ保守本流としての本懐はここにあるのではないだろうか。

組閣当初は、それまで外交に目立った活動がなかった岸田の外相就任には疑問の声はあったが、いまはそれを完全に払拭する活躍を見せている。この実績を前にすれば、安倍にとっても国民にとっても岸田の外相就任は「正解」だったと言うしかないだろう。

岸田文雄の経歴を振り返れば本当に多くの分野に関わってきた政治家だということが分かる。そしてキチンと実績を残す。ある分野の専門家を自認する政治家は多いが、ここまで広範囲をカバーする政治家は珍しい。しかも「広く浅く」ではなく「広く深く」なところが頭が下がる。

岸田はまだこれからの政治家である。自民党の三役こそまだだが、外務大臣という「総理の条件」と言われる一角のポストに就き、また宏池会会長という地盤もある岸田は、間違いなく今後の永田町のキーマンとなろう。今後岸田はどう動くのか、注目である。

（敬称略。文・『翔』編集部）

NPDI外相会談の出席者による慰霊碑参拝・献花

Member, House of Representatives
飛翔
Fumio KISHIDA

岸田文雄プロフィール

昭和32年生まれ。早稲田大学法学部卒業後、㈱日本長期信用銀行等を経て、平成５年の衆議院議員総選挙において初当選。以後７回連続当選中。

自民党青年局長・商工部会長・経理局長、建設政務次官・文部科学副大臣、衆議院厚生労働委員長などを歴任後、平成19年の第一次安倍改造内閣において内閣府特命担当大臣（沖縄担当など）で初入閣。初代消費者行政推進担当大臣として消費者庁新設の土台を作る。

平成23～24年にかけて野党自民党において国会対策委員長として指揮をとり、与党に対して厳しい国会追及を行い、解散に追い込む。

また24年には保守本流の政策集団である「宏池会」の会長に就任する。

平成24年の衆議院総選挙後に発足した第二次安倍内閣において外務大臣として入閣し、世界を舞台に奮闘中。

岸田文雄の Let's Tune! 76.6FM Heartful Station
ハートフルさろん
■放送：毎週木曜日午後４時３０分から
（再放送：毎週日曜日午後５時から５時３０分）
■ FMちゅーぴー FM７６．６MHz
好評放送中

岸田文雄後援会事務所

●国会事務所
〒100-8982 東京都千代田区永田町2-2-1
衆議院第一議員会館1222号室
TEL (03) 3508-7279（直通） FAX (03) 3591-3118

●広島事務所
〒730-0013 広島市中区八丁堀6-3
和光八丁堀ビル９階
TEL (082) 228-2411（代表） FAX (082) 223-7161

●岸田文雄ホームページ
http://www.kishida.gr.jp/
ケータイ用サイトQRコード

季刊「翔」五十九号　発行 平成二十六年四月五日
自由民主党広島県第一選挙区支部「翔」編集室
〒730-0013 広島市中区八丁堀六ー三　和光八丁堀ビル九階